
探偵、傾城塚秋の右腕

御手洗団子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵、傾城塚秋の右腕

【Nコード】

N7502X

【作者名】

御手洗団子

【あらすじ】

探偵、傾城塚秋の右腕である郡山日高が、めだか率いる箱庭学園生徒会執行部に副会長として配属された。そして、物語は迷い始める。

OPENING 『俺の名前は郡山日高！ 箱庭学園に通う高校二年生だ！』

俺の名前は郡山日高！ 箱庭学園に通う高校二年生だ！

幼馴染の黒神めだかは完璧鉄壁超サイヤ人で、箱庭学園の生徒会長を務める。

普段から遅刻を繰り返す俺の為に毎朝起こしに来るが、まったく面倒な奴だ。未だに昔の約束である婚約を憶えているんだ。そんなの子供の約束だろうに。

そのめだかの実の姉である名瀬天歌も、俺にちょっかいをかけてくる。

会う度に俺に改造させる、人体実験ならどうだなどショッカーよろしく悪に道に誘う。何度か寝込みを襲われて、改造台に乘せられて良く分からん機械で俺の身体を改造しようとする。

しかも全身素っ裸。

しかしその度に天歌の親友の古賀いたみが嫉妬して、くじらがそれを宥める。俺は一人悲しく裸で半日放置プレイ。

昼休みになれば高校からの知り合いである不知火半袖から食事の誘いを受ける。不知火の見事な食べっぷりで、見てるこっちまで満腹になる幻覚を見る。アイツの胃袋はどうなっているんだ？ 胃カメラで覗いてみたい。

江迎怒江は熱烈で猛烈で強烈なアピールをする。やたら長いセリフ

が主で、無理に逃げようとすれば俺を腐らせようとしたり、刃物で刺したりする。俺は何処まどこの誠まことくんだよ。命が幾つあっても足りないよ。

平戸ロイヤルは……………あいつは……………なんて言うか……………

……………存在感が凄い！！ 以上！！！！

最後に我らが主人公のひとよしぜんきち人吉善吉は、とあるマイナスの能力『晴天間』セクシャルトレードで女体化を果たして、ひとよしぜんこ人吉善子として生まれ変わってしまった。

そんなハチャメチャな女友達に囲まれながら、俺は波乱万丈の人生を送る話をこれからしよう！！

なんて夢を見た。我ながらくだらない夢だと思った。

なんだこの在り来たりなギャルゲー展開。今時こんな作品流行らないよ。

僕は布団を頭まで被せる。兎に角眠い。全くめだかは人使いが荒い。上級生である僕を扱き使わないで欲しい。

そんな事を思いながら時計を確認すると、

「うわ、もう8時かよ」

このままだと朝飯をゆっくり食っている暇は無い。取り敢えず俺は下の階へ行く。

簡単な朝ご飯でも作ろうと台所を覗くと、昨日買った食パンがあった。今日はこれにしよう。

適当にジャムを冷蔵庫から出しながら、トースターでパンを焼く。

焼き上がったパンにイチゴジャムを塗って、一口。うん、香ばしくて良い味だ。

僕は胃袋にパンを詰め込む。ハンガーに掛けている制服を着こんだ。制服の丈が短い。当然だ、なんせ僕はたった一年で十六cm伸びたんだ。164cmから180cmに。ハッキリ言ってキツイ。もう買い変えないと駄目だ。

手提げの黒い鞆を持ち、僕は破天荒共が集まる学園、箱庭学園へと歩み始めた。

OPENING 『俺の名前は郡山日高！ 箱庭学園に通う高校二年生だ！』

どうも初めまして、または久しぶりです。御手洗団子です。

小説のあらすじやタグは釣りです。近いうちに書き換えます。

ただ、もし最初のギャルゲーの設定の話が見たい人がいれば、感想か私に直接『見たい』と送ってくれば、あらすじ通りの話を書きます。

それではSee you Next.

PROLOGUE 『ヒッキーはめだかの元で修業でもしてて』

最初に言って置こう。僕は普通じゃない。

普通と言うのはノーマル^{ノーマル}って意味ではない。^{スペシャル アブノーマル マイナス}特例や異常や過負荷の中だったら、勿論僕は普通の部類だ。

しかし、僕は普通ではない。めだかの側近であり語り部であり、第二の主人公の人吉善吉は普通の^{やから}中の普通と表現する輩がいるけど、充分に普通ではないだろう。

学内のあらゆる格闘技の部活を荒らし、生徒会の庶務で、「デビル」や「サタン」の言葉を使用するセンスや、周りの人から好かれやすく、人並み以上の努力家である彼は普通であってはいけない。

彼が普通なら、箱庭学園に通うモブキャラは、全員普通より劣っている事となる。

もしもどんな人物が普通か、なんて聞かれたら僕は迷わずこう答えるよ。

自分を普通だと言っている奴は、まず普通ではない。

だって普通なんて周りが評価するもので、自分が普通だと思ってちゃいけない。

自分を普通だと言う奴に限って、周りに可愛い女の子がいたり、実は伝説の誰かの子孫、誰かの生まれ変わりなど、特別な能力を秘めた能力者だったり、偶然な幸福が幾つも舞い込んだりする奴が多い。

だから僕は^{あらかじ}予め言つて置く。僕は普通ではない。

僕は^{アブノーマル}異常である探偵部の部長^{けいせいづかしゅう}傾城塚秋の右腕で語り部だ。傾城塚はテレビで取り上げられる難事件を幾度も解いてきた『地上最高の閃^{ひらめ}きを持つ探偵』と世界中から呼ばれる。

得意の能力でどんな事件も解決。潜入捜査やストーキング能力に長^たけていて、FBIやICPOとのコネもある。つーか度々^{たびたび}国外へ捜査に行く。

一週間前からそうだ。アメリカの秘密機関が何やら大問題を発生させ、それが公になる前に解決してくれとFBIのお偉いさんが直々に傾城塚を連れて行った。

「遅くても俺は一ヶ月でこの事件を解決させるから、ヒッキーはめだかの元で修業でもしてて」

なんて事があり、僕は生徒会長の副会長（仮）となった。一ヶ月の期限付きで。

^{ちな}因みにヒッキーとは僕の渾名。^{「おりやまひだか}郡山日高だからヒッキー。僕は決してひきこもりではない。

これだけで僕が普通じゃない事を読者は理解しただろう。

他にも取り上げる所とすれば、両親が既に他界済みで、妹は親戚の家で楽しく住んで、ちよつと変態的趣味嗜好があつて、三回ぐらい死にかけて、恋人がいない歴〃〇年である。ほれ、全て特殊だ。

自分を普通だと言い聞かせる主人公がいたら僕は殴りたくなる。だって普通じゃないのに普通だと言い張るなんて詰まらない。どうせたった数話で普通じゃない身体能力や、普通じゃない異能力や、普通じゃない人間関係を築いていたり、普通ではありえない世界規模の争いに巻き込まれるのだから。

かと言って本当に普通でも詰まらない。普通の人が普通の生活をして、普通の友人関係で、普通に進学をして、普通に就職して最後には普通の人生を歩んでも面白くない。こんな本誰が買うんだ？

最後に理解して欲しいのは、この物語はこれからめだか達が歩むはずだった一方通行の電車れんさいに僕が乗り込み、本来通れない路線ルートの上を電車を走らせ、最終点の駅さいしゅうかいを変えるのだ。

さあ、僕が変えためだかの物語を始めるとしよう。

PROLOGUE 『ヒッキーはめだかの元で修業でもしてて』（後書き）

オープニングで出した設定のめだかギャルゲーは、改めて後日に投稿予定です。
楽しみに。

第一箱 「この学園に常識を求めては駄目だろ？」

時を遡ること四月某日、黒神めだかの生徒会会長就任式が始まった。
さかのぼ

黒神は就任挨拶の為、箱庭学園講義館の壇上で自己PRを始めた。

「世界は平凡か？」

少なくとも僕の感じている世界は充実している。

「未来は退屈か？」

今は部活動が忙しくて面白いから問題ない。悪いな黒神。

「安心しろ。それでも生きる事は劇的だ！」

傾城塚に振り回されっぱなしだからある意味劇的だ。これ以上の劇的な世界は、僕は要らない。

「そんなわけで本日より、この私が貴様達の生徒会長だ」

うん。なにがそんなわけだかわからない。

「学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩みごとがあれば迷わず目安箱に投書するがよい」

いやちょっと待て。これでは箱庭学園探偵倶楽部の仕事が減ってしまう！ 営業妨害だ！

「24時間365日、私は誰からの相談を受ける!!」

止めてくれ……、これではまた傾城塚が俺に文句を浴びせる展開だろ……。

こうして、新生徒会会長黒神めだかの就任式が終わり、探偵倶楽部の仕事数が極端に減ってしまった。

「ヒッキー、どうして、今日は、依頼が、一つも、無いの?」

案の定傾城塚は不機嫌な表情を浮かべて、校長室にありそうな黒いフカフカなソファーに寄りかかって、僕に解り切った質問を投げかけた。

「黒神めだかが生徒会長就任と共に、目安箱を設置し、目新しさだけで依頼人がそっちに流れたと」

それを聞いた傾城塚は部室に備え付けのデスクトップパソコンを起動させた。どうやら今日の依頼は外部の依頼を確認するようだ。

ここで傾城塚の、僕が持つ勝手なイメージを語ろう。傾城塚秋。黒神めだかがいなければ『歴史上最高の頭脳を持つ探偵』として名を轟かせていた残念探偵。記憶力では黒神に負けるので、閃きという点では、黒神と対当している。

外見は悪戯好きの悪ガキが黒いスーツを着ている、みたいな。これは僕の勝手なイメージだからあまり信用しないで欲しい。見る人によつては美少年だとか、凛々しい顔立ちだと思ふ奴らがいる。だか

ら飽くまで、僕の傾城塚に対するイメージである。

年齢は10歳だが、持ち前の頭脳で飛び級で唯^{ただいま}今高校二年生。

実際大学卒業レベルの頭脳は優に超えているが、本人曰く「俺は奇人変人が集まる箱庭でなら、自分なりの青春が出来ると思って、此処に入学した」そうでこれ以上飛び級はしたくないと。

「ヒツキー、お前、潜入捜査してこない？」

「いきなりですね」

「いきなりです。黒神めだかが困る依頼をしてきて」

「例えば？」

「そうだな。例えば『ぼ、僕の性処理を、て、手伝って欲しいんだな』って」

「なぜ裸の大将！？ しかもそんなこと黒神に頼んでも、絶対TE NGAとエロ本渡されて終了ですよ！！」

傾城塚はヤレヤレと首を左右に振った。

「分かって無いね。俺の勝手な予測だが、きっとフ。ラぐらいならしてくれるだろ」

「どんな同人誌展開だよ！！ お前の頭には常識は無いのか？！」

「この学園に常識を求めては駄目だろ？」

おっしゃる通りで。この学園には常識を持つ人が少ない。風紀員は子供が仕切っているし、金に五月蠅い競泳部のトビウオがいたり、柔道界の反則主義のキングや半裸のプリンスがいる学園では常識は存在しない。

極めつけはこの探偵倶楽部。従業員二人の何ともお粗末な組織だが、奇跡的に成り立っている。

僕が雑用、主に推理や頭脳担当が傾城塚。潜入捜査は場合に依じて俺がハリウッド並の特殊メイクでやつたり、傾城塚自らすつぴんで行くこともある。故に、傾城塚いる所に事件あり、とまで言われている。

「冗談はさておき。今日は目ばしい依頼はなさそうだ」

「結局今日は外からの依頼も無いんですね」

「いや。あるにはあるが、依頼の内容が詰まらない上に報酬金が割に合わない依頼が一件。これからこちらが希望する金額を送る」

そう言いパソコンのキーボードに小さな手で一つずつアルファベツトを打ち込む。傾城塚は頭は良いが運動神経がトコトン駄目な人物、否、身体を動かすのが苦手なのだ。パソコンのブラインドタッチもろくにできない。資料作成は僕の仕事なので僕に押し付けるが、依頼の交渉は傾城塚の担当なので今回のような場合は傾城塚が直々に返信する。

ふと傾城塚は何かを思いついたのか、キーボードの不規則な音を停止させた。

口元を釣り上げて、悪ガキがなにかくだらない事を思い付いた笑いをする。

「ヒッキーの今回の仕事を考えた」

絶対黒神に関する依頼だ。きっと黒神を陥れるおとしこトンデモ作戦だ。

「考えないでください。探偵部への依頼に関係ある仕事をください」

「では俺からの依頼だ。成功すれば報酬を出す。これで文句は在るまい」

そう来たか。流石に僕の言葉では傾城塚を口で勝てない。

「今日からめだかを監視しろ。そして奴らに來た依頼をこちらが先に解決させるんだ」

「すごい短絡的な作戦だ!!」

「これぐらいしなければ学園の一般生徒はこちらに振り向かんだろう。あの超人的一年生の黒神めだかに勝たないと」

傾城塚はまだ根に持っているのか。しょうがないか。黒神がいなければあの迷宮入り間近の難事件を傾城塚が解決していたのに、タツチの差で黒神に全て持っていかれたんだから。

「成功報酬はお前が欲しいもの何か一つをやる。どうだ?」

「その依頼、全力で取り組みます!!」

人間現金なもので、こんなこと言われたら誰だって依頼を受けるだろ？

そんな訳で、本日午後3時36分。本日この時を以^もって黒神めだかの監視が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7502x/>

探偵、傾城塚秋の右腕

2011年11月15日17時07分発行